町史だより —No.16—

〜西原の方言②〜

—棚原（タナバル）編（続）—

棚原の伊波ウトさん、比嘉茂子さん、比嘉キヨ子さんからは方言の聞き取りを行いながらいろんなお話しをうかがいました。その中でもこんな話が…。

—ンナグワー（たにし）食べましたか？

茂子さん…食べましたよー、学校から帰りに田んぼから取ってきて。ターイユ、今のフナ、あれも取ってきてよく油にあげてよく食べよったですよ。

キヨ子さん…前はあれー、畑のチンナン。カタツムリみたいのがある。ハルチンナンといって。アジクーター（濃い味）だったよー（笑い）。

ウトさん…エンチュ（ネズミ）も食べたし。

キヨ子さん…ほんと何もかも食べましたよ。

茂子さん…アタビー（カエル）なんかもよー、取ってきて油にチャーラミカシテ、おいしかったね。なにもないもんですからね、こんなして生活していたんですよ。病気しても昔は氷もないし、熱があっても氷で冷やすのもないから、あのーバサウー（芭蕉）ですね、あれ切って細かく刻んでからに、これで熱とりよったんです。生まれた赤ちゃんにはフーチバー（ヨモギ）をしぼって飲ましよったんですよ。

キヨ子さん…脱脂綿でクチグワー（吸い口）つくって。

茂子さん…ヨモギには胎毒下しといってね、生まれたらこれをあげよったんです。こんなにしてみんな育ってるんです。

ウトさん…夏になったら子ども浴びせるときには、ゴーヤー（にがうり）のはっぱ、あれ取ってきて。

茂子さん…あれは今も使っているよ。皮膚病にいいからね、あれで体を洗ったら皮膚病にかからないとか。またキーム（桃）のはっぱね、よく使っているんですよ今の若者も。袋に詰めてね、お湯かけて。

—ヤマトグチでいう海人草のことは方言でなんといいますか？

茂子さん…ナチョーラ。これはよく食べましたよ、アギンチュ（海から遠い地域の人）は。年一回、虫下しといって、馬肉と炊いて。旧暦四月十五日のムシバレーのときによくナチョーラを食べたんです。

—というような動植物の話。

それらは食用だけでなく、薬としても使われていたのですね。もちろん、部落によって方言名や用途は違ってきます。民間療法で使われた動植物については『西原町史』民俗編の「草根木皮などによる薬物的療法」（五二二五頁）や「薬餌（やくじ）」（七八八頁）に記述があります（それによると、フナ、カエルも薬餌となっている）。また棚原では、薬餌を使うときの御願の願文も唱えられていたようです（『沖縄民俗』第二二号）方言で唱えられる願文は、一つの方言作品ともいえます。生活の中の方言は民俗事例の中からもひろい出だすことができますね。

表1 棚原の方言・音声表記

和名	方言名	音声表記
タニシ	ンナグワー	nnaˀgwa=
フナ	ターイユ	ta=ˀiju
カタツムリ	チンナン	tʃ(ˀ)innaN
カエル	アタビー	ˀatabi=
ネズミ	エンチュ	ˀwentʃu
芭蕉	バサウー	basaˀwu=
ヨモギ	フーチバー	hu=tʃiba=
ニガウリ	ゴーヤー	go=ja=
桃	キームム	ki=mumu
海人草	ナチョーラ	h(ˀ)atʃo=ra